

共同研究 ● 宗教人類学の再創造——滲出する宗教性と現代世界（2013-2016）



退職後、ロバと共に巡礼路に行くフランス人。教会へは長い間行っていないという（2008年5月、スペイン、フロミスタ、サンティアゴ・デ・コンポステラへの巡礼路、岡本亮輔撮影）。

変化の兆し

西欧的な近代社会の成り立ちにおいて、宗教を私事化し、公的政治の領域からその影響力を払拭して世俗社会を形成することは、「近代性」の大きな指標の1つであった。しかし近年、そうした社会形成のあり方に再考を迫る事象が散見される。

もっとも分かりやすいのは、宗教的勢力や集団が意図的に世俗の領域に乗り込んでくる現象で、社会福祉への貢献を目指す仏教運動であるエンゲージド・ブディズムや、カサノヴァ（1997）が公共宗教と称して挙げる事例などがそれにあたる。あるいは世俗の側が、古典的な宗教の機能を再評価し、再利用するという現象もある。たとえば中国の場合、共産主義体制への失望や、経済的格差の拡大に対する不満、拝金主義の末の虚無感などから、一般民衆の間に幅広く宗教への関心が高まっている。ほんの30年前まで宗教全般に批判的だった政府当局自身すら、国民統合のために中華民族意識を強調し、その中心に儒教精神を据えているのである。

さらに、世俗の側は依然

として宗教を避けているつもりが、角度を変えてみると、なぜか宗教の似姿になっているというやっかいな現象もある。公的政治のレベルでいえば、ベラーがアメリカの政治風土の宗教性について指摘した「市民宗教」（Bellah 1991）は古典的な例である。私的なレベルでは、伝統的な諸宗教集団には批判的でありつつ、それらの教義を折衷統合したような世界観を具えた「スピリチュアル」ブーム、気軽に始めた旅行がいつのまにか巡礼効果を持つツーリズムなどが挙げられる。種々のNPO活動にみられる自分探しや、環境保全思想にみられる自然回帰志向やガイア仮説などにも、“そこはかたない宗教性”が感じられることがある。

ただし、その一方で忘れてならないのは、いわゆる無神論者や無宗教者が増えていくという印象もぬぐえないことである。2013年10月1日の朝日新聞によれば、欧州でキリスト教信者が減少し、教会が閉鎖

されたりサーカス学校に転用されたりする現象が広がっている。ひるがえって日本では、葬式や墓の管理方法の急激な変化に伴い、「葬式仏教」への批判が高まっている。表面的には伝統宗教の衰退と見ることができるが、だからといって人々が宗教的思想や生活習慣一般から本気で訣別しようとしているのか、実際に訣別可能なのか、別種の精神的価値がそれにとって代わるだけではないかといった問題については、さらなる見極めが必要である。

こうした状況を、私たちはいったいどう理解すればいいのだろうか。



公立小学校における昼食前の瞑想実践（2010年9月1日、タイ国ローイエット県、矢野秀武撮影）。

新たな宗教性をどう捉えるか

この研究会では、上記の課題に取り組むうえで、以下の3点を研究の指針とする。

まず、月並みなようだが、各研究員が個別の事例について具体的な実践のレベルで文化人類学的調査を行なうことである。特に留意すべきは実践者自身がどういう行動や言葉を使って宗教的なものを発露させているのかを捉えることであり、研究者の頭の中にある学術

用語をいったん忘れて向き合い、汲み取ることである。

その一方で、当該社会で流通している宗教概念や宗教に関する制度についての理解も必要である。中国のように国民が持つべき精神的価値観について党や政府が公式見解を示すような社会では、市井の実践者が学術用語を駆使しながら日常的な宗教実践を行なうこともある。その一方でフィールドによっては、国家の宗教言説や制度の影響が弱い

ところもあるかもしれない。本研究では、15人のメンバーの協力関係をいかして、そうした政治の影響力の程度そのものの地域的温度差を測ることを試みたい。すなわち、各研究者が自らのフィールドが属する国家の宗教制度や近代的「宗教」概念導入の経緯、それがフィールドに及ぼす影響などについて基本的な調査を行ない、それをメンバー間で共有し、近代的宗教制度の分布と広がりについて、ある程度マクロな見取り図を作ろうというのである。厳密な比較が不可能なことは承知の上である。しかし、この作業を通して「宗教」概念や制度導入にあたっての歴史的影響関係や、地域ごとの宗教制度の特徴や違いが明らかになるだけでも、新たな発見や見方を生むきっかけになることが期待できる。

3点目は、概念の吟味と設定である。ここでもすでに「宗教」「宗教性」を特に定義せずに用い、「そこはかたない宗教性」などとあやふやな表現をしているが、それは現象にそうした分類を施す私自身の「直観」のなせる業である。本研究では日本における宗教状況および宗教研究史を再確認してその「直観」を見つめ直すべく、日本をフィールドとする宗教研究者の参加を仰いだ。欧米の理論研究については主にゲスト講師の力を借りつつ、日本と、各自のフィールドと、多くの学術用語を提供している欧米の、文化の三角測量を意識的に行ないながら概念の見直しを進めたい。

この作業にあたっては、世俗と宗教、聖と俗などの二項対立図式の乗りこえが1つの鍵となる。たとえばユルゲンスマイヤー(1995)は、宗教と世俗的政治理念は別物であり、相容れないものという従来の捉え方を批判し、両者をどちらも社会をまとめる「秩序のイデオロギー」として、同じ土俵に乗せて並列的に扱うことを試みている。また、フランク(2006)は個々人の「生きる意味の探究」としての人生に焦点を合わせることで、有神論的な探究と無神論的な探究を接合している。こうした発想をヒントに、現地の実践者にとっての宗教性と、研究者自身の直観における宗教性とに同時に目を凝らして言語化しながら、それを既存の欧米の学術用語と関連づけていく地道な作業をすることになる。また、頭でっかちな空論に陥らぬよう、「宗教」一般でなくどの「宗教」(教団、教義等)なのか、「宗教性」一般でなくどの「宗教性」(社会的秩序化の力、個人の人生に価値を付与する力、人間を超越したものについての想像力等)なのか、具体相から離れることなく思索する足腰の強さが要請されよう。



個人宅の祭壇に弥勒や観音と並べられた毛沢東の胸像。決して珍しい事例ではない(2011年3月17日、中国雲南省芒市、長谷千代子撮影)。

以上に挙げた3点は互いに関連しており、先にどれかの作業をきれいに済ませてから他の問題に取り掛かるといふふうに切り分けることはできない。しいて言えば2点目の近代的宗教制度の整理は比較的独立的に扱えるかもしれないが、1点目と3点目の成果次第で、その理解や解釈がまるで変わってしまう可能性もある。3点にバランスよく目配りする広い視野の確保と細部を疎かにしない探究を両立させることが、本研究の成功の鍵となる。

計画と展望

初回の研究会はすでに2013年10月5日に行なわれた。今回は3月、さっそく上記の第2の課題、すなわち各国の近代的宗教制度研究に着手する。その後も長期的に取り組んで、単なる国別宗教制度一覧表ではなく、相互の関連性と違いについての調査と考察まで含めた、深みのある見取り図に仕上げたい。

また、必要に応じてゲスト講師を呼び計画であり、初回では政治学者の施光恒(九州大学)を招いた。施によれば、日本における人権教育は、個人の権利と義務といった欧米的観念ではなく、命の根源的「つながり」や「思いやり」といった情緒的基盤の上に展開されているといい、そこにはどこか「生命主義的救済観」(対馬ほか1979)を彷彿とさせるものがある。今後もこのように、宗教研究ではない角度から世俗の中の宗教的なものを探り当ててきた研究者も視野に入れつつ、必要に応じて幅広くゲスト講師を招く予定である。

各研究員はこうした研究会を通じて問題意識を共有しながら個別研究を行なう。また、共同研究期間を通じて、国内・国際学会で積極的に個人発表やパネル発表を行ない、研究会外部の力も借りて議論を深化させ、最終年度に成果出版の目途をつけることを目指したい。

【参考文献】

- Bellah, R.N. 1991. *Beyond Belief: Essays on Religion in a Post-Traditional World*. University of California Press.
- カサノヴァ、ホセ1997『近代世界の公共宗教』津城寛文訳 玉川大学出版部。
- フランク、V.E. 1999『<生きる意味>を求めて』諸富祥彦他訳 春秋社。
- 対馬路人・西山茂・島蘭進・白水寛子1979『新宗教における生命主義的救済観』『思想』11月号 no. 665: 92-115。
- ユルゲンスマイヤー、M.K. 1995『ナショナリズムの世俗性と宗教性』阿部美哉訳 玉川大学出版部。

ながたにちよこ

九州大学大学院比較社会文化研究院講師。専門は、文化人類学的手法による宗教研究。主に中国雲南省をフィールドとする。著書に『文化の政治と生活の詩学』(風響社2007年)、論文に『「宗教文化」と現代中国:雲南省徳宏州における少数民族文化の観光資源化』(川口幸大・瀬川昌久編『現代中国の宗教:信仰と社会をめぐる民族誌』昭和堂2013年)など。